漢詩鑑賞　令和七年九月　　　　　　　　　　　　　　　　　　玉井幸久

　酬李穆　　　　　　　　にゆ

孤舟相訪至天涯　　　うてにる

萬轉雲山路更賖　　の　にかなり

欲拂柴門迎遠客　　をってをえんとすれば

靑苔黃葉滿貧家　　　　　につ

【通釈】

　起句　君はただ一人で舟旅をして遠く天のはてまでよく訪ねて来てくれた。

　承句　舟旅のあとの、雲のかかった山々の間を曲がりくねって連らなる陸路は更にいつそう遠く感じられたことでしょう。

　転句　粗末な住まいを掃除して、遠來の客をおもてなししたいと思うのだが、

　結句　貧乏屋敷には青々とした苔と黄葉が満ちているばかりで、何のおもてなし

　　　　　も出来ません。

【語釈】

　酬…むくいる。①酒席で受けた杯をさし返すこと。

　　　　②贈られた詩に詩を作って応答すること。

　李穆…人名。唐の人。劉長卿の女婿となった。

　孤舟…ただ一そうの舟。つれのない舟。　　ここでは舟による一人旅をいう。

　相訪…訪ねる。相は相互の意ではなく対象を訪うの意。

　天涯…天のはて。ごく遠いところ。

　柴門…柴で作った門。転じてむさくるしい家。隠者の棲まい等にいう。

【押韻】

　平声　麻韻。涯、賖、家、

【解説】

　劉　長卿（七0九―七八五）は盛唐の人。字は文房。開元二十一年（七三三）進士

　及第。官途に就き淮南岳鄂轉運留後の職に在った時、無実の罪で潘州（広東省）に

　流された。後赦されて睦州（浙江省・淳安縣）司馬となり、更に随州（湖北省）刺史

　となった。

　この詩は作者が睦州に在った時、女婿（むすめむこ）の李穆が彼のもとを訪ね詩を

　贈ったのに酬えたもの。詩の全半で遠來の客をねぎらい、後半で貧乏暮しで何の

　おもてなしも出来ないとあやまる分りやすい詩となっているが、遠路訪ねて呉れた

　女婿への労をいたわる心情と共に、風雅な住まいの様子が感じられる美しい詩と

　なっています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上